talk

ムーリッドを中心とする在日セネガル人の民族誌的研究序説

清　水　貴　夫

はじめに

日本には約322万人の外国人が暮らしている。在日外国人のイシューは、古くから在日中国人や朝鮮半島出身、さらには、20世紀初頭からブラジルに移民した日本人の帰還の問題などの存在が知られ、ジャーナリストや政治学者、社会学者、文化人類学者により、人権問題、アイデンティティ、移動など、様々な角度から報告がなされてきた。近年では、在日外国人に対するヘイトスピーチ、移民二世、三世に関する問題、ポストコロニアル的な文脈の研究等の旧来からの問題意識に基づいたものに加え、さらには宗教を紐帯とした移民の世界を描き出す研究も増えている（たとえば樋口ほか2007）。そうした中、日本の移民問題ではニューカマーであるアフリカ大陸出身者については、これまでほとんど研究対象となったことはなく、我われのもとに届く情報は、不法滞在の嫌疑をかけられたアフリカ出身者に対し、入国管理局での暴行致死事件など、報道のレベルのものが多かったのが現状である。在日アフリカ人を対象とした研究は未だ十分であるとは言えないが、後に述べる、和崎春日の研究グループは積極的にアフリカ出身者を追いかけ、少しずつではあるが、研究実績が積み上げられている。

本研究では、近年来日者が増加しているセネガル出身者に注目する。セネガルはイスラームのスーフィー教団が政治、経済、社会、文化のあらゆる面で強く影響している。特に、経済との結びつきは、人びとの生活に強く影響を及ぼしていることは、これまでにも小川了をはじめとする多くのセネガル研究者が指摘されている（小川1998など）。来日するセネガル人の多くもムスリムで、彼らの動態の一面はセネガルの宗教的文脈の延長線上に位置づけられる。筆者が本研究に従事し始めてから3年が経過したが、現在の在日セネガル人のコミュニティ形成は独特な展開を見せ始めつつあり、現在進行形で展開する変化を民族

誌的に記述していくことが、本研究の目的である。この研究課題の中で、本稿では、特に次の2つの点について報告する。まず、1990年代から現在に至る在日セネガル人の来日目的の変化を「三世代論」としてモデル化し、その特徴を提示する。もう1つは、2023年に設立された新たなセネガル人の結節点となる可能性を秘めた「セリーヌ・トゥーバの家」についての設立過程についてである。

なお、本稿は2023年5月21日に同志社大学で開催された「移民の参加と排除に関する日仏研究会」での口頭発表（「在日セネガル人のコミュニティとイスラーム」）の資料を基に、研究会で指摘のあった点へのリプライ、さらにその後行われた調査で得た資料を加筆し、修正したものである。

1. セネガルとセネガルのイスラーム

1-1. セネガル

セネガルはアフリカの大陸の西端に位置

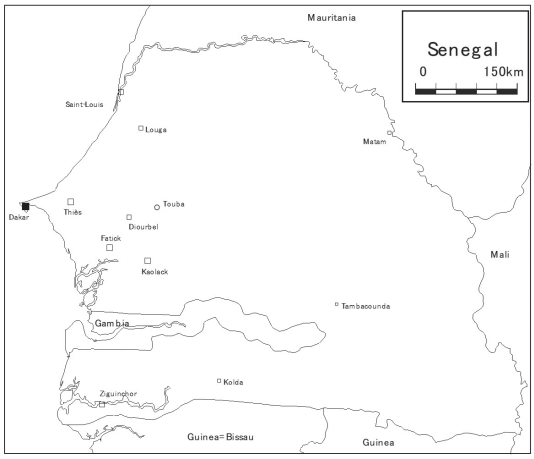


図1. セネガル

している。人口は約1700万人、面積は約20万平方kmと人口規模、面積ともアフリカ大陸内においても小さな国家だといってよいだろう。しかし、1895年に西アフリカの大半をフランスが植民地化し、フランス領西アフリカ（AOF: L'Afrique-Occidentale française）を設立すると、最初にモーリタニア国境にほど近いサンルイ、その後1902年に現在の首都でもあるダカールに首都を移し、フランス植民地支配の拠点とした。現在では、経済的な面ではコートジボアールに水をあけられているが、政治、文化の面では、セネガルの西アフリカフランス語圏の中心的な位置づけはゆるぎのないものがある。

こうした背景もあり、セネガルでは、1960年に独立した後もフランス語が公用語として定められ、特に都市部ではフランス語がよく通じる。しかし、人びとの生活言語は各民族語のほか、国民の5割以上を占めるウォロフ語が生活言語として使用されることが多い。

主な産業は約半数が従事する農林水産業であると言えるが、その一方で、人口の約半数が大都市圏（ダカール、トゥーバ、サンルイなど）に集中し、都市化が進むアフリカ諸国の中でも特に都市化が顕著な傾向にある。もう一点付け加えておけば、セネガルの就学率は9割を超え、大学進学率も16%前後と周辺国に比べ、アフリカ大陸内では比較的教育水準の高い国であるということが言える。

写真 1. トゥーバのモスク

2014 年筆者撮影

写真 2. トゥーバのモスク内のアーマド・バンバの霊廟

2014 年筆者撮影

1-2. セネガルのイスラームとムーリッド

次に、セネガルの宗教状況をみていこう。

セネガルの人口の 95％がムスリムである（外務省）。セネガル人の大多数を占めるイスラームであるが、神秘主義教団（スーフィー）が力を持っており、特に、ティジャーニア教団、ムーリッド教団、ライエンヌ教団、ニアセン教団の 4 つの教団が中心的なものである。人口はわずかであるが、ダカールの南に位置するサリー周辺はクリスチャンが集住しており、その多くはセレールだと言われている。

本稿で登場する在日セネガル人の多くがムーリッド教団に所属する人びとである。ムーリッド教団について簡単に説明をしておこう。

ムーリッドは現在セネガルの第二の都市であるトゥーバで生まれた。創始者のアーマド・バンバは弟子たちと共に教団の本拠を定め、モスクを建設する。このモスクは現在も建設途上にあるが、1㎞四方の広大な敷地に、大理石が敷き詰められ、構造物にもイタリアやモロッコから輸入された石材が使用され、高さ 80m といわれるミナレットを備えた西アフリカ最大のモスクとなっている（写真 1）。この壮麗なモスク内には、創始者バンバの霊廟（写真 2）が備えられ、教団のシンボルとなっている。このモスクを中心としてトゥーバで毎年行われるマガル・トゥーバ[1]はセネガル最大の祭礼である。マガルが行われる数日間は国民の休日となり、公的サービスの多くが停止され、国内外から 300 万人がトゥーバを訪れるとも言われている。宗教的な祭礼でありながら、セネガルを象徴する行事となっている。

ムーリッド教団のサブグループにバイファル Baye Faale[2] と呼ばれる集団がある。バイファルはアーマド・バンバの弟子イブラ･ファールに源流を持つ。イブラ･ファールはウォロフの戦士階級出身であると言われ、ムスリムであるにも関わらず飲酒癖や

暴力があった放蕩な人物であるとされ、他の弟子からは忌避されていた。しかし、アーマド・バンバからは格別の寵愛を受け、それに応え、教団に対して固い忠誠を誓ったと言われる。イブラ・ファールを模し、バイファルたちは、ドレッドロックス、太い革のベルト、時にカラフルな継ぎはぎ柄の服装と、その派手な出で立ち、ムスリムの義務の一つである礼拝を行わないなど、彼らの行為や出で立ちから、時に社会的逸脱者と認識される。ダカールなどの都市では、バイファルの風体をした若者たちが、小銭を入れたひょうたんを鳴らし、本当か否か疑わしい寄付を募る。その一方で、バイファルは労働を礼拝に代替させて宗教的生活の中心に据え、勤勉な労働者と認識されている。バイファルの出で立ちの中で、太い革ベルトを締めるのは、満腹感をより長く維持し、生産した食糧を消費することを抑制することを象徴すると語られることが多い。こうした労働を重視する宗教実践を行うムーリッド教団は、小川了（1998）が「国家の中の国家」と評するほど、セネガル国内での強力な政治経済的影響力をもつといわれている。

1-3. 在日アフリカ人研究史

次に先行研究として、これまでの在日アフリカ人研究にまとめておく。

日本における外国人研究は、第二次世界大戦前後に日本に連行された近隣諸国の外国人を研究対象とした研究が先行した。当時の視点は、在日外国人と日本社会との「統合」に着眼点があったが、バブル経済期後期 1990 年代初頭から、在日外国人数が増えると、「トランス・ナショナル」な視点へとパラダイムの変化があったと述べる（梶田 2003）。こうした動きを個別具体的に分節化して分析したのが、アジア諸国出身者らを詳細に調査した駒井洋など社会学者たちであった。

90 年代初頭には、まだ 2000 人前後とアフリカ出身者の数は微々たるものであったこともあり、在日アフリカ人研究は他在日外国人に比べると研究が開始された時期が遅い。90 年代後半になると日本に居住する者も次第に増えていく。こうした、新たな在日外国人問題としてのアフリカ大陸出身者に着目したのが、文化人類学者の和崎春日である。和崎は 2004 年に「来住アフリカ人の相互扶助と日本人の共生に関する都市人類学的研究」と題する科研費研究（基盤（B））を立ち上げ、本格的な在日アフリカ人研究を開始する。この研究プロジェクトでは、東京圏、関西圏、名古屋圏と言った都市圏で暮らすアフリカ出身者の民族誌的研究に主眼が置かれる。当時の研究は、アフリカ出身者が日本人からの一方通行的な扶助を受けた、共生関係が想定されていたかもしれない。時代背景的に考えれば、「貧困」の大陸アフリカから逃れて日本に出稼ぎに一時的にやってくる、というアフリカ研究者の実感があったようにも考えられる。筆者なりに解釈すれば、この研究が、

より日本に根を張った「在日」という用語ではなく、「来住」という、一時滞在を想起させる慎重な言葉選びにも、こうした点を見て取ることができる。この研究は、在日アフリカ人研究のフロンティア・ワークともいえるもので、アフリカをフィールドとする研究者、大学院生が、日本におけるアフリカ人の生活の実態を記述し、その後の研究の複数の着眼点を抽出したという意味で意義深いものであった。和崎を中心とする研究グループは、さらに2007年から「滞日アフリカ人の生活戦略と日本社会における他民族共生に関する都市人類学研究」（基盤（A））へと発展的に展開する。ここで使用される「滞日」という用語は、アフリカ出身者が一時的に「出稼ぎ」に来ているわけではなく、より長期的な展望を持ちながら戦略的に日本に生活していることを指し示していると筆者は理解している。滞日アフリカ人たちは、日本社会の様々な規範に戸惑い、時に忌避に晒されながらも、「アフリカ」という括りを用いることで、自律的に日本社会との共生を図っていることを明らかにした。このプロジェクト以降、和崎の視点は、「日本」という国民国家の枠を越え、アジア諸国との関係性にも気を配りながら、グローバルな世界の中のアフリカ出身者の動態を捉える方向にあり、和崎自身も韓国やベトナムでのアフリカ出身者の動きを観察している（和崎編 2008）。

和崎プロジェクトで活躍した当時の大学院生や若手研究者は、こうした和崎を中心とする研究を引き継ぎ、アフリカ研究者を巻き込みながら研究を継続している。在日アフリカ人研究の枠組みで、その後特に目覚ましい研究を展開しているのは、松本尚之であろう。2007年の和崎プロジェクトに参画した松本は、それまでのアフリカの王権研究を土台とし、イボ人のローカルな王権制度が在日イボ人の社会関係の中に埋め込まれるという事例を示し、アフリカの人びとの社会関係を考える上で、多くの示唆的な論考を上梓している（松本 2014, 2019a, 2019b）。また、若林ちひろは、在日ガーナ人を中心とした、社会関係を示した論稿を発表すると同時に、アフリカ出身者の健康問題にも着目した研究を展開している。さらに、鈴木裕之や菅野淑はアフリカの音楽芸能を生業とする在日アフリカ人を中心とした調査研究を進めており、在日アフリカ人と日本人の文化交流や、アフリカ出身者のアイデンティティの問題にも切り込んでいる。このうち、菅野はセネガル人のサバール・ダンサーと日本人愛好者を中心として形成されるコミュニティについての研究に従事している（菅野 2009, 2021）。官民が主催する国際交流イベントでしばしば公演するアフリカの音楽やダンスは、一般的な市民のアフリカへの入り口となる。彼らは、最も我々の目に触れる位置にあるだけでなく、その生存戦略や恋愛、さらには多くのアフリカ音楽、ダンス愛好者にとってのアフリカのコンタクトゾーンを提供する存在として大変重要な研究である。

菅野が提示するアフリカン・ダンス・コミュニティは、趣味の範疇を越え、ダンサーが主催するセネガルやギニアといった、エンターテイナー自身の出身国で行われる現地ツアーに参加する。アフリカ出身者として最も露出の多いダンサーの事例は、在日アフリカのイメージのプロトタイプを形成するが、その反面で、少なくとも現在ではマジョリティーとなった、「普通の」セネガル人たちの生活実態とは大きくかけ離れたものであることは明記しておきたい。

そして、先述の通り、和崎はその間、日本だけでなく、アジア諸国で活発な活動を展開するアフリカ出身者にも目を向ける。和崎は韓国、ベトナム、中国での調査の事例を踏まえ、すでに多くの論考で報告している。これらの研究では、国家という想像上の境界を軽々と乗り越え、ダイナミックな活動を展開するアフリカの人びとの動向を垣間見ることができる。そして、同時期に香港のチョンキンマンションでフィールドワークを行った小川さやかの著書(2019)はあまりにも有名な著書であり、アフリカの人びとから見た、日本を含めたアジアを我われは学ぶことができる。最後に筆者のこれまでの研究にも簡単に触れておきたい。発表者は、歌舞伎町、六本木と言った東京の歓楽街で客引きなどに携わるアフリカ出身者の調査を行い、2005年からは、在日アフリカ人による警察の不当暴力を国家賠償請求訴訟とした事例の調査を行った。残念ながら、その報告はわずか1本の報告(清水2008)にまとめたに過ぎないが、インフォーマルな仕事はアフリカ出身者の滞日期間における、一時的な仕事でしかなく、ゆえに、この仕事に就く期間は基本的に非常に短く、継続的な調査ができなかったことに由来することは明らかになった。そして、この研究から、アフリカ出身者が日本を目指す理由のいくつかのパターンがここで明らかになっている。

在日人口の多いナイジェリアやガーナ、近年のエチオピアは、それぞれの形でコミュニティを形成し、日本社会に根を張りつつあるが、フランス語圏アフリカのコミュニティには、大きな動きが見られなかった。松本が示したような、伝統権力構造を日本に持ち込み、ナイジェリアとの連続的なコミュニティを形成する（松本2014, 2019a, 2019b）としたコミュニティ形成とは異なり、ここ数年の在日セネガル人のコミュニティ形成のプロセスは、元々備わっている宗教的な集合性を基軸とし、セネガルを中心とした世界的なコミュニティの一部として、独特の進歩を遂げており、在日アフリカ人コミュニティの中でも出色の様相を呈している。

2. 日本におけるアフリカ出身者

2-1. 日本におけるアフリカ出身者

以上、簡単に在日アフリカ人研究を中心にレビューした。次に、在日アフリカ人の統計資料を提示する。

法務省入国管理局によれば、2022 年現在の在日アフリカ人数は、19,681 人とされている。1990 年に 2,140 人、1995 年に 5,202 人、2000 年に 8,214 人、2005 年に 10,471 人、2010 年に 12,130 人、2015 年に 15,745 人とその数は急激に増加している。こうした中には、留学、就業、結婚などが中心となっており、観光を目的とした滞在はほとんど見られない。

54 の国と地域を含むアフリカ大陸には、様々な言語圏が存在する。話者数に限ってみれば、アフリカ最大の人口を持つナイジェリア、ケニア、南アフリカと言った英語圏が最も大きく、コートジボアールやカメルーン、そして本報告で着目するセネガルなど、フランス語を公用語とする国々が 2 番目に多い。このほか、ポルトガル語圏やアラビア語、スペイン語圏があり、その国独自の言語を公用語とするのは、エチオピアやソマリアなどごく一部の国である。こうした言語は、移民が目指す先を選択する際に強く影響することは言うまでもない。

この観点から見れば、外国語に苦手意識を持つと言われる日本でも、中等教育までででかろうじて英語には接した経験があることから、日本で生活するのは、英語話者が有利である。このことは国別の在日者数に如実に表れている。現在の在日アフリカ人数上位のうち、ナイジェリア、ガーナ、南アフリカ、ケニアと言った英語圏の国々に出自を持つ人が多い（表 1）。これに対し、

表 1. 在日アフリカ人

出身国	人数
ナイジェリア	3,497 人
ガーナ	2,610 人
南アフリカ	1,173 人
カメルーン	1,067 人
セネガル	965 人
ケニア	897 人

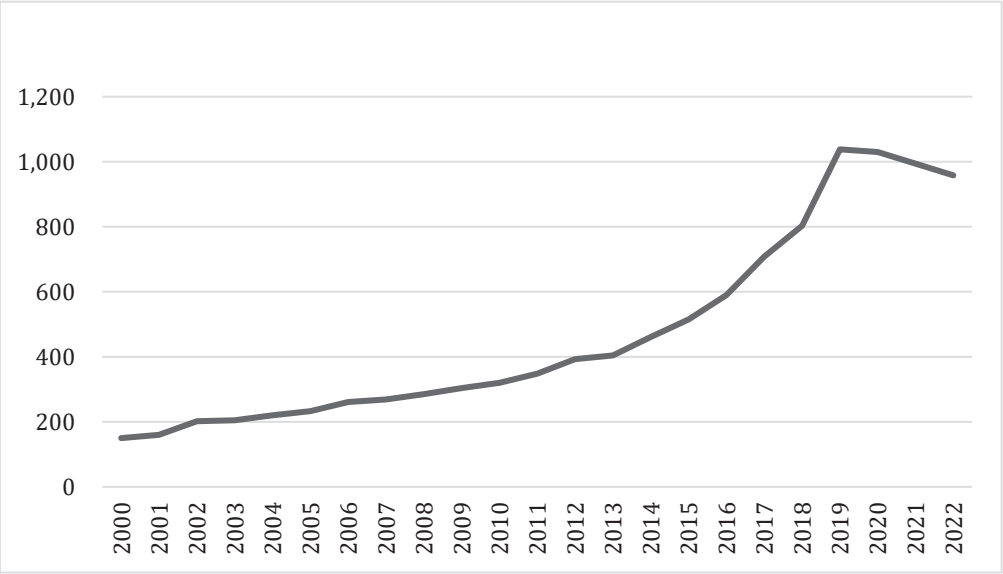
出典：e-Stat法務省入国管理局（2023）

フランス語圏はカメルーン、セネガルの出身者が 1,000 人近い在日者数を数えるが、それ以外は 100 人前後と、それぞれのコミュニティの規模は非常に小さい。また、英語、フランス語以外の言語を公用語とする国については、数名から数十名レベルとなる。

2-2. セネガル出身者

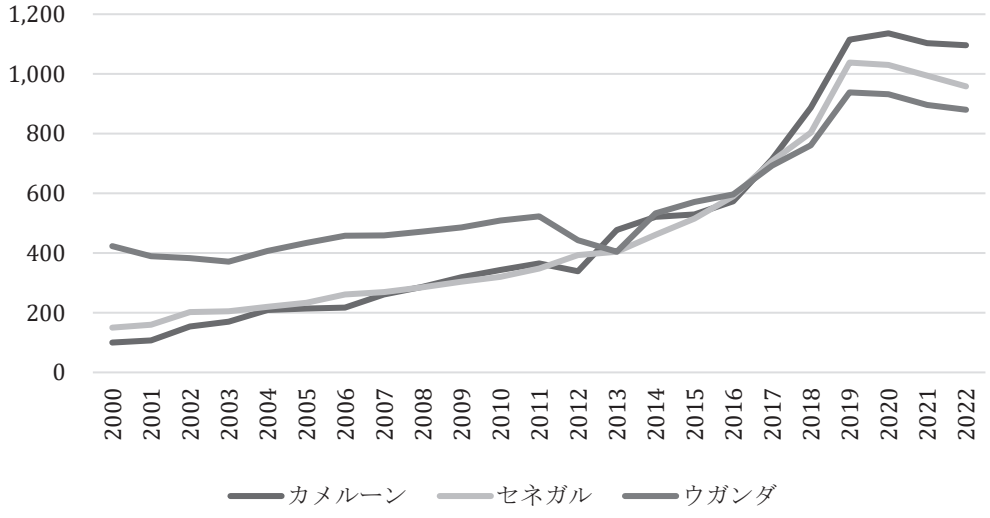
次にセネガル出身者数の推移を確認していく。表 2 は 2000 年からの在日セネガル人数の推移である。2000 年には、150 名だった在留者は、コロナ禍直前の 2020 年には 1,136 人まで増加している。この表を見ると、2000 年から 2012 年ころまでは、緩やかな増加曲線をたどっているが、2013 年を過ぎると、コロナ前の 2019 年まで急激に増加していることが分かる。こうした傾向は、セネガルだけでなく、在日者数がセネガルに近い、カメルーンやウガンダなど、他のアフリカ諸国出身者の増加傾向と類似していることは興味深い（表 3）。

表 2.　在日セネガル人統計（2022 年末現在）



出典：法務省出入国在留管理庁 e-Stat

表 3.　在日アフリカ人数の比較



出典：法務省出入国在留管理庁 e-Stat

3. セネガル移民の渡日の変遷

3-1.「普通の」セネガル人の「発見」

筆者は和崎プロジェクトの課題で、六本木や新宿と言った繁華街で働くアフリカ出身者の調査を実施していた。筆者が接したアフリカ出身者のすべてが男性であり、彼らの就いていた仕事が、風俗店の客引きやブラック･カルチャー系の服飾店であった。また、先に述べた和崎プロジェクトで紹介された自動車解体工場での日雇い労働やエンターテイナー、風俗店の客引きなど多くの事例がインフォーマル・セクターを想起させる職場に属する人びとのものであった。在日セネガル人に関しても、唯一まとまった研究を行っていた菅野の研究がエンターテイナーを対象としたものであったことから、筆者自身も在日アフリカ人の就業状況はインフォーマルで不安定である、というイメージを持ち続けていた。

2020 年にコロナ禍が本格的になると海外での調査が困難になり、筆者は国内での調査へと方向転換し、在日セネガル人へと調査対象を移した。この調査のゲートキーパー的な役割を担ってくれたのが A 氏である。A 氏は、セネガル人男性 B 氏を配偶者とする日本人女性であり、これまでに 3 年以上のセネガル滞在経験がある。

A 氏、B 氏の周囲のセネガル人数名を紹介してもらったが、そのすべてが、日本で正規雇用を獲得した人びとであった。また、2020 年、2022 年に横浜で開催されたマガル・トゥーバでは、多くの在日セネガル人との出会いがあった。その多くが、流ちょうな日本語を操り、家庭を持ち、将来への明確なビジョンを持つ者が多い。また、多くが流ちょうな日本語を話し、この調査を通じ、ほとんどフランス語を使用することはなく、一時しのぎのインフォーマルな仕事に就き、その場を凌ぎながらカネを稼いで暮らす不安定さを感じさせることはなかった。

2021 年に A 氏、B 氏の紹介で知り合ったセリーヌ・ファル・ガイ Serigne Fallou Gaye 氏は最古参の在日セネガル人で、日々の会社勤務に加え、NGO の代表として、他のセネガル人の生活サポートしている。周囲のセネガル人からも信頼の厚い人物である。時間に厳しく、そうしたことを「日本社会に適合すること」と述べるガイは特に折り目正しく、筆者の目から見ても、「日本人よりも日本人らしい」人物であった。

こうして、2020 年以降に在日アフリカ人の調査を再開したものの、この時期に接した在日アフリカ人たちは、風俗店での一時雇用を渡り歩きながら、日本人配偶者を求めバーやクラブを渡り歩くという、（もしかすれば筆者のみが持っていたかもしれないが）過去のイメージを想起させるものではなかった。なぜなら、この時期に筆者が面会したセネガル人たちは、電話、メールでアポイントをとり、面会する際には、ネクタイを締めてくるような人物たちである。そして、彼らが就く仕事も、いわゆる

「サラリーマン」そのものであり、営業職や技術職としてそれぞれの会社の第一線で活躍している者ばかりである。この間に出会った数十人の在日セネガル人には、誰一人としてエンターテイナーはおらず、在日アフリカ人が「日本人」である我われとさほど変わりのない日常を暮らしている。在日アフリカ人≒エンターテイナーという認識は、大きく変更しなければならなかった。筆者にとっては、「普通の」セネガル人の「発見」であった。

3-2. セネガル移民三世代論

3-2-1. セネガル移民三世代論

こうした在日セネガル人の滞在形態の差はどのように生まれたのか。当然のことながら、「普通の」セネガル人の年代や来日年代は個人的な事由に基づくものであり、その存在はランダムに見られるはずである。しかし、A 氏が横浜で行われるマガル・トゥーバの会場に向かう東海道線の中で語ったことは、非常に示唆に富むものであった。A 氏が述べたのは、「私はセネガルから日本にやってきた人には 3 つの世代があると感じている」と、来日時期により、セネガル人の来日事由や来日後の生活が大きく変化しているということであった（2021 年 9 月 25 日フィールドノート）。

一般的に、移民の世代論は、中国、朝鮮半島、ブラジルなど、古参の在日外国人の事例を事例とし、第一、第二世代が来日し、次第に生活の軸足を日本に移し、第三世代以降の世代では「母語」を喪失し、日本語のみを使用するようになる。つまり、世代を重ねるに従い、次第に生活や言語が現地化していくプロセスを扱う側面に目を向ける研究である。在日セネガル人が 2013 年以降急激にその人数が増加したことを考えれば、こうしたクロニカルな視点からの第三世代はまだほとんど生まれていない。

2010 年代前半以降、セネガルの経済状態は大きく伸長し、2023 年には BRICS への参入を申請するなど、経済的には中進国入りも現実的である。セネガルは、もはや慢性的な貧困に苛まれる国ではなく、この間に人びとの生活は大きな変化を遂げている。表 2 で示した、カメルーン、ウガンダ、セネガルは、アフリカ諸国の中でも、政治的に安定し、順調に経済的発展を遂げている国々である。A 氏の示した「三世代論」は、むしろ、母国の政治経済社会的な変化による来日事由の変容を示している。

A 氏は、三世代論のそれぞれの世代の特徴を以下のように説明する。第一世代は、外交ミッションや国費留学が日本との最初の出会いであり、その後日本の企業に就職するなどして長期滞在となっている人びとである。第二世代は、経済的な充足を求め、アフリカから脱出を試みた人びとであり、日本入国に成功した者がセネガルのダイラに連なる人びとを引き込んだ。そして、第三世代は、留学先の一つとして日本を自主的に選択した人びとである。こうした A 氏のそれぞれの世代の具体的な説明は示唆

的なものである。しかし、在日セネガル人を配偶者とし、多くの在日セネガル人と交流を持つ A 氏と言えども、約 1,000 人まで増えた在日セネガル人の、それぞれの世代の特徴が詳細につかんでいるわけではない。筆者にとっても、全体の状況を把握することが困難であることに、十分に留意しながらも、多角的にアプローチすることにより、可能な限り立体的に在日セネガル人の実態をつかむようにしていくことが重要であろう。

三世代論を検討する上で、来日するための動機、来日するための「伝手（ネットワーク）」、そして、来日したのちの生活の見通しと安定は、移民が長くその土地に居つくための最重要課題である。次項以降では、セネガル人コミュニティが出来上がるに至る諸要素について検討していく。

3-2-2. セネガルと日本を繋ぐ人びと

3-2-1 で述べたように、第一世代は、1990 年代後半ころまでに来日したセネガル人であり、外交ミッション、国費留学等、いわゆる高学歴層が渡日し、日本人の配偶者を得るなどして滞日を始めている。第一世代の多くはエリートであり、大学や公的機関に所属しながら日本文化に馴染んでいくことで、日本での生活基盤を形成してきた。第一世代を日本に誘ったのは、きわめて個人的な繋がりがあった一方で、多くが国費奨学金や公的なミッションであったと考えられる。

しかし、その後、2000 年ころから日本を訪れる第二世代の来日動機は、その様相を大きく異にしている。第二世代は、経済的な事由で来日した人びとが多い傾向にある。彼らの来日の方法は、日本人からの招待状を入手することが第一関門であり、この関門を突破すると、家族、親戚、ダイラの兄弟子など、ありとあらゆるチャンネルを使って渡航資金をかき集める。そして、渡航すると知己を頼り、できる限り節約をしながら金を稼ぐ活動を始める。観光ビザによる入国のため、長時間の労働することができないため、必然的にインフォーマルな仕事をすることとなる。そして、その間、ビザの期間を延ばすためのあらゆる手段を講じる。その一つが日本人との結婚によるものである。こうした滞在を企図したセネガル人たちは、実に積極的に日本人女性にアプローチをかけていく。もう一方で、日本人配偶者を持つセネガル人は、必ずしも来日後に交際を始める例ばかりではない。たとえば、2009 年の事業仕分けにより、応募者が半減した青年海外協力隊 / 海外協力隊（以後「協力隊」）だが、このセネガル派遣数は 2023 年末までで 1,154 名（女性 679 名、男性 475 名）であり、協力隊との結婚が来日のきっかけとなった例も少なくない。また、1990 年代後半から 2000 年代にかけ、バックパッカーとしてアフリカを訪れる若者が多かったこと、さらに、菅野の研究に見られるような、音楽やダンスを通じたセネガルとの交流が盛んになった

ことなども、セネガル人－日本人の交際を後押ししたことは想像に難くない。

また、2013年ころまでK日本語学校で日本語教師として勤めていたS氏の存在は、この時期のセネガル人の来日に強く関わっている。S氏は、K日本語学校で日本語の教鞭をとっていたが、その後セネガル側で日本留学の代理店を持ち、勤務していたK日本語学校にセネガル人を積極的に送るようになっていた。S氏の活躍が、フォーマルな来日傾向を持つ第三世代を生み出す大きな要因になっていることは間違いないだろう。

第三世代に移る前に、もう少し第二世代について論じておこう。何とか来日した者は、今度は彼ら自身が受け入れとなり、セネガルから兄弟、友人を招き入れることも盛んに行われていた。彼らが招き入れるのは「兄弟」や「友人」と説明されるが、それらは同時にセネガルで同じダイラに属し、宗教的な繋がりのあった者という、もう一つの枠組みを持つ。ダイラとは地域と宗教指導者を単位として形成され、合同の礼拝やハサイド[3]の朗誦、宗教的な説教が行われる、宗教的なイベント、もしくは組織である。生活共同体を形成するダイラもセネガル国内に数多くあり、この傾向は特にムーリッド信者によくみられる。ムーリッド、バイファルの中には、若いころからダイラを生活の中心とし、その紐帯は、家族と同様のものであることも頻繁にみられる。

そして、第三世代になると、第二世代とは全く異なる層が来日するようになる。第三世代は、2015年前後から現在にかけて来日するセネガル人たちである。彼らの多くは、近年、セネガルで形成されつつある中産階級層の子弟であり、近代教育の中等課程までを修め、留学先として日本を目指した者が多い。第一世代と同じく国費留学など、奨学金を得て来日するものがいる一方、自費で留学してくるものが多いのが特徴的である。上のS氏がK日本語学校に招き入れたセネガル人には、多くの者が来日後に日本語学校に通い、日本語検定試験で優秀な成績を修めて、大学に入学し、日本の企業に就職する、というライフコースをたどるものが多い。セネガル出身者が入学する日本語学校や大学は、ある程度固定化されている。大学に進学する多くが工学系、IT系を専攻する傾向が見て取れる。セネガル人がどのような理由でこうした大学に入学するのかは、今後の調査課題としておきたいが、関東地方にあるいくつかの大学、学部に固まっていることは一つの特徴として捉えておきたい。

これまでの筆者の調査のサンプルは10名前後であり、これまでの調査を一般的な傾向として理解することは難しい。しかし、端緒に就いたばかりの調査とは言え、これまでにインタビューに応じてくれた、第三世代のセネガル人が、日本的な「サラリーマン」として、何年も企業に勤務し、セネガル人同士で結婚し、セネガルからの家族

を呼び寄せ、セネガル人同士で日本で暮らす者が多いことは大変興味深い。筆者が参加した和崎研究プロジェクトで着目してきた、インフォーマルな生業に就く者にせよ、菅野の研究で着目されるエンターテイナーの多くが日本で配偶者を探すことを常態としてきたことを考えると、第三世代のセネガル人が必ずしも日本人配偶者を探さないことは、大きな変化として着目しておく必要があるだろう。

3-2-3. 日本における生活基盤の整備

アウトサイダーにとって、渡航先の生活基盤の有無は、渡航前には大きな不安としてのしかかるし、渡航してからもどの地点から生活が始まるかで、その成否を左右する。ヤマグチは在日ブラジル人コミュニティを研究し、集住型と分散型に分けてその特徴を検討した（ヤマグチ 2021）。日本の在日外国人の多くを占める中国、朝鮮半島、ブラジル出身者は、数十万人規模の移民人口を持ち、チャイナ・タウン、コリアン・タウン、ブラジリアン・タウンを形成し、出身国だけでなく、時に同地方出身者同士で集住し、物理的なコミュニティを形成している。近年でも、高田馬場のミャンマー人コミュニティや、西葛西のインド人コミュニティなど、在日者の増加と時間の経過と共に、集住型居住を始めるコミュニティが増加してきている。たとえば、ブラジル人コミュニティのうち、愛知県豊田市の保見団地は約 4,000 世帯のうち、90％ほどがブラジル人の世帯である。また、栃木県大田原市も人口の 30％前後がブラジル出身者であると言われている。これらの集住型居住が常態化した地域では、出身国の生活習慣が持ち込まれ、その国の商品が多く出回り、学校や住民組織にもニューカマーの影響が強くなる。また、道路標識などもブラジルの公用語であるポルトガル語が併記されるなど、公的サービスまでも在日外国人に適合するようなケースも見られる。こうした結果、学校、医療といった公共空間において先住の「日本人」コミュニティとの軋轢を生み、共生のための方策が打たれることとなる。ヤマグチは、こうした集住型居住の条件として、構造的資源（土地、カネ、資本）の有無について言及するが、ブラジル人コミュニティをはじめ、中国、朝鮮半島出身者においても、構造的資源の蓄積により集住が進んでいったことは確かだろう。

アフリカ出身者のグルーピングは、特に在日者数の多い、ナイジェリア出身者の間に確認することができる。そのほかの地域出身者の間にも、国家単位のもののほか、個別民族によるもの、「アフリカ人留学生」の集団など、様々な要因から分節することができる。逆に繋がりが極めて薄いのが、他言語圏通しで、英語圏とフランス語圏出身者は、ほとんど交流がない（「アフリカ人留学生」の集団以外）。バルトの「エスニック・バウンダリー」論（Barth 1969）は、和崎プロジェクトでもしばしば援用され、

民族集団、出身国家、アフリカ大陸は在日アフリカ人が表象するアイデンティティの源泉となっているが、実際的にはアフリカ大陸という枠組みは、表層的な面にとどまっているようである。

約 1,000 人となったセネガル人コミュニティではあるが、現在のところは、分散型居住にとどまっている。しかし、同国出身者が緩やかにつながる大きなグルーピングはあるものの、関東地方だけで関東地方で見ても、神奈川県や東京都南部、町田市などと埼玉県、東京都北部という緩やかなグルーピングを見て取ることができる。このグルーピングは、セネガル最大の祭礼である、マガル・トゥーバの会場が南関東（横浜）と北関東（埼玉）で行われていることからわかる。二か所での開催されるようになったのは 2019 年からであるが、この時期は在日セネガル人の急増期（表 2）で、その前年には会場から人があふれ出していたこともあり便宜的に二か所となった、という側面もあることは附しておく[4]。筆者は準備段階のみの参加であったが、2020 年に横浜で行われたマガル・トゥーバは、300 人を下らない参加者がいたと言われている。このグルーピングは単純に居住している地理的な位置によると考えられ、民族集団や宗教集団といった、アイデンティティに関わるものではない。

こうした定期的に行われる祭礼は、分散型居住形態の在日セネガル人をつなげる結節点となっている。こうした結節点がより多く作られることにより、相互扶助の関係や交流の機会が増えていく。筆者の六本木調査（清水 2008）でもそうであったように、レストランやバーなど飲食店は在日外国人の集合場所となり、同国、同民族集団の結節点となるケースが多い。だが、セネガルの食文化を考えると、一般的に他のアフリカ諸国に比べると、家族やダイラといった親しい者同士で食事をとることが多く、一人で食事をすることは非常に少ないため、外食文化は、セネガルの経済的背景を考えるとそれほど浸透しているとは言い難い。これは在日セネガル人の間においても同じことがいえる。関東圏には複数のセネガル料理を看板とするアフリカ料理店が存在するが、どちらかというと日本人客が多く、セネガル人客がそこに集うことは稀である。一方で、セネガル人女性が経営する埼玉県坂戸市のセネガル食材店「AfriButik」は多くのセネガル人に利用されており、一つの結節点となっているのではないだろうか。固定された結節点は数少ないものの、ダイラやマガル・トゥーバといった、宗教的なイベントないし、同郷集団の会合は在日セネガル人にとって、最も頻繁に親しいセネガル人と交わる機会になっている。

居住形態には、三世代論である程度の差異が見られる。第一世代は、高階層出身者が多く、在日歴も長いことから、現在の状況を見る限り、常勤の職業に就き、住居を所有するなど、安定した生活を送る者が多い。特徴的なのは第二世代で、インフォー

マルな世界を渡り歩く彼らは、来日当初は小さなワンルームに複数名で寝泊まりし、家賃負担を小さくすることが多かったという。日本人配偶者を見つけ、結婚すること、稀にフォーマルな仕事に就くことは、こうした環境を抜け出す、数少ない方法であった。そして、第三世代になると、第二世代のように一部屋に複数名が寝食を共にする、といったことはほとんど見られなくなり、学生寮や社員寮、賃貸アパートなどで暮らすようになる。B 氏は、第二世代のような生活スタイルができる世代ではないとまで述べる。

もう一点の重要な生活基盤に収入源の確保がある。筆者の研究（清水 2008）でも、アフリカ系の人びとの就業の困難さについて記述したが、特に第二世代のような経済的な事由で渡日を決めた人びとにとっては、どのような仕事でどれくらい稼げるのか、という点は最大の関心事である。

第二世代の初期のころに、来日から日本社会に馴染むまでの間の「キャリアパス」が構築されたという。来日直後の日本語が未熟な時期の就業は非常に困難である。新たに来日したセネガル人が、日本語ができない状態で最初に就業するのが、埼玉県にある「肉屋」である。「肉屋」での作業はほとんど言葉を発する必要がないため、ある程度の日本語を修得するまでの間、日本語を学びながらここに勤務する。この「肉屋」勤務は、在日セネガル人コミュニティの間で引き継がれている。日本語でのコミュニケーションができるようになると、「肉屋」を卒業し、「ゲンバ」（土木作業）の仕事に就くことが多い。第二世代では、比較的給与水準の高い「ゲンバ」の仕事を長く続ける者が多く、中には、重機や大型免許などの免許を取得し、一時的な作業員としてのレベルを越え、本格的に勤務する者もいる。こうした、第二世代の構築した「キャリアパス」は第三世代には引き継がれていない。学業や仕事を目的として来日した第三世代は、学生であれば、仕送りや奨学金によって生活基盤を築き、学業の合間のアルバイトをするのであり、生活費全般を自ら稼ぎ出そうとする動機が薄い。

以上、「三世代論」を展開し、それぞれの世代の特徴を、来日理由、来日後の生活基盤の形成に関わる事象と照らし合わせてまとめた。現在の在日セネガル人コミュニティは、コロナ禍を経て再度拡大の傾向を示している。筆者の周囲でも、セネガルと日本をコンテナでつなぐ試みる者、日本のスタートアップ企業と事業を始める者、セネガルの家族を呼び寄せ日本語教育を求める者など、第二世代とは異なった形で日本社会と交わりを深めるセネガル人が多く存在している。こうした、セネガルと日本の交流の中で、最も顕著なのが、次節で示す「セリーヌ・トゥーバの家」の事例である。セリーヌ・トゥーバはムーリッド教団を象徴する聖人であるが、また、セネガルの象徴として、この施設が「セネガル」という国による統合を進める可能性がある。まだ、

写真 3. セリーヌ・トゥーバの家

筆者撮影（2023 年 5 月 7 日）

写真 4. ズィクル

筆者撮影（2023 年 5 月 7 日）

できたばかりの施設であり、現在のところ、その機能の評価をすることは困難だが、間違いなく、在日セネガル人の新たなモーメントを作るきっかけにはなるはずである。

3-3. 新たな結節点の創出

3-3-1. セリーヌ・トゥーバの家の設立

2022 年 11 月、ガイ氏との 3 度目の面会において、ガイ氏より、2023 年に埼玉県に「セネガル文化センター」を設立する計画が進んでいることが知らされた。その後、ガイ氏より、2023 年 5 月 7 日に埼玉県東松山市に「セリーヌ・トゥーバの家（Keur Serigne Touba）」の開所式が月例のダイラと同時に行われるとの連絡があり、筆者は同地を訪れた（写真 3）。

セリーヌ・トゥーバの家は、ガイ氏らが組織する NPO（Touba Tokyo）が中心となり計画された。これまで在日セネガル人の父親的存在として、多くの在日セネガル人の世話をしてきたガイ氏にとっては積年の望みであった。セネガル人（特にムーリッド）のコミュニティは、ダイラを中心に形成され、それぞれのダイラには、多くのセネガル人が参加している。小規模なダイラは、セネガルで同じダイラに所属していた者同士が日本でも同じダイラを形成することが多い。この意味では、セリーヌ・トゥーバの家は、地域ごとの小さなコミュニティの集合体と言うことができるかもしれない。

2023 年 5 月 7 日に行われた開所式の様子をさらに描写しておこう。

セリーヌ・トゥーバの家は、国道に面した大型レストランを居抜き、つまり、すべての内装を引き継いだ形で譲り受けている。13 時に始まる開所式の前から、10 名前後の男性たちが、キッチンに入り、この日の料理を作り、別の 10 名ほどの男性は、車座になりズィクル[5]を行っている（写真 4）。ガイ氏ら、幹部たちは様々な打ち合わ

せを行っている。

13 時が近づくにつれ、次第に多くの人が集まって来る。集っているのはほぼ全員が男性で、女性の姿はほとんど見られない。また、この日集まった中に筆者以外にも何人かの日本人が含まれていた。彼らは、セリーヌ・トゥーバの家が所在する東松山市と同市の南側に位置する朝霞市の警察官であった。なぜ警察官が呼ばれていたかは、後述することとし、開所式の描写を続けていく。

13 時になると、いよいよ開所式が行われる。100 名ほどのセネガル人男性が集まった会場は、はじめにガイ氏から、セリーヌ・トゥーバの家の設立の経緯についての説明から始まる。そして、この施設の将来的な展望が語られた。ガイ氏が語るのは、この施設では、毎月のダイラが行われ、祈りの場（モスク）で宗教的な修養を積むことができ、ニューカマーのセネガル人が、宿泊する場に困らず、日本語が習得できるなど、最初に頼ることができる場として、そして、最後にいつでもセネガル文化に触れられる場として機能することを目指していくことと述べる。ガイ氏が述べるこの施設の将来像は、裏返せば、30 年に及ぶガイ氏の在日経験の中で、セネガル出身者に必要性を感じていた点でもある。

開所式は、その後、参加者の紹介へと進んでいく。ガイ氏から、この施設の設立に関わった数名について紹介される。特に、よく紹介されたのは、資金的に下支えした M 氏であった。M 氏は元々プロスポーツ選手として来日し、引退後は不動産業を営む、在日セネガル人の中でも出色の存在である。在日歴は 20 年を越え、日本人女性と結婚し、日本国籍も持つ。M 氏の他に、会計経理を担当する O 氏など、4 名が紹介された。

セネガル人の中心人物の紹介のあと、この日参加していた日本人が紹介される。紹介された日本人は 3 名で、筆者以外の 2 名は先述の通り、朝霞市と東松山市の警察官である。セリーヌ・トゥーバの家ができる以前、在日セネガル人は、朝霞市の公的施設を借りて毎月のダイラ、マガルなどの祭礼を行っていた。ガイ氏はこうした祭礼を行う際、必ず警察に届け出を提出し、警察の立ち合いを受けることもしばしばだったという。開所式への警察の招聘は、元の管轄である朝霞警察から、東松山警察への引継ぎの機会ともなっていた（写真 5）。

それと同時に、ガイ氏らは、自ら進んで警察にアプローチすることで、不必要なコンフリクトを避けるための戦略をとる。東松山署の警察官は、筆者に対してもアフリカの文化や慣習、食についての質問を投げかけ、情報の収集に努めていた。また、警察からガイ氏らに対し、自治会など、地域住民と軋轢を生まないよう、そのために東松山市の国際交流協会や地域住民課など、市役所の関係部局への通達の重要性や自治会への挨拶をすることなど、ガイ氏らにアドバイスを送った。

写真 5. 参加者を紹介するガイ氏

筆者撮影（2023 年 5 月 7 日）

写真 6. 礼拝をする参加者

筆者撮影（2023 年 5 月 7 日）

この後、イスラームの礼拝がガイ氏の先導の下で行われ（写真 6）、参加者すべてに食事（チェブ・ヤップ[6]）が振る舞われ、開所式は終了した。会自体は 1 時間半ほどで終了したが、その後もほとんどの人が会場に残り、旧交を温め、新たな企画、また、相談事がそこかしこで行われ、筆者が会場を離れた 19:30 の時点でほとんどの参加者が残っていた。

3-3-2. セリーヌ・トゥーバの家の機能

上記のように無事に開所されたセリーヌ・トゥーバの家は在日セネガル人にとってどのような機能を果たすのだろうか。3-3-1 でガイ氏のビジョンを紹介したが、これをさらに詳細に見ていこう。将来的な機能は以下の 3 点にまとめられる。

①宗教的な拠点

毎月のダイラを行い、イスラームの信仰の拠点としての位置づけはセリーヌ・トゥーバの家の最大の機能となる。セネガルから来日した人びとの宗教的な拠点となることは基より、ガイ氏によれば、現在では在日 2 世が見られるようになったが、こうした層はイスラーム教育を受けていない。2 世のイスラーム教育がセリーヌ・トゥーバの家で行われることまでがガイ氏らのビジョンに組み込まれている。そのため、敷地内には、モスクの建設が企図されている。

②在日セネガル人の育成とセネガル文化の日本への伝達の拠点

こうした宗教的な規範の教育に加え、日本語やウォロフ語の教育も重要な課題として挙げられている。来日し、日本での生活に馴染むためには、日本語の習得は最初に乗り越えなければならない壁である。筆者

が面会した第三世代の若いセネガル人たちの多くは、日本の大学を卒業するほどの日本語力を有し、筆者との面会でも流ちょうな日本語を操り、フランス語すらほとんど使用しないほどであった。その反面、第二世代の人びとは、インフォーマルな日本語を使用し、筆記が不自由なくできる者はそれほど多くない。オフィシャルな仕事に就くためには、読み書きまで習得することが必須条件となる。また、ウォロフ語の教育は、セネガル人のみを対象としたものではなく、セネガルに興味関心を持つ日本人に対しても開かれ、セネガル文化に接する機会を提供し、セネガル、アフリカへの窓口となることを目指している。

③来日したセネガル人ニューカマーへのサポート

第二世代はニューカマーのための「キャリアパス」を構築し、小さなワンルームにニューカマーを招き入れるなど、個人的な関係性の中で日本での生活をサポートする体制を整えてきた。この仕組みは、セネガルの人びとの濃厚な人間関係を示しているが、裏返せば、こうした関係性を持たない人びとにとっては、日本で新たに生活を始めるのが非常に困難であることを示している。第二世代を見ていたガイ氏は、新たに日本で挑戦しようとするセネガル人の滞日初期段階において、ニューカマーにセリーヌ・トゥーバの家に宿泊してもらい、食事や就職の斡旋を行うなど、日本社会への馴化支援の機能を持たせようとしている。

本稿執筆時点で開設から1年に満たない施設ではあるが、こうした機能を持たせるため、ガイ氏らの模索が続いている。一つに地域社会との連携を模索するため、東松山市役所との連携活動を行い、自治会との関係構築を行うなど、地盤固めを行っている。

4. まとめと課題

以上、1990年代から現在に至る在日セネガル人の「三世代論」モデルと、その特徴を提示し、2023年に設立された新たなセネガル人の結節点となるセリーヌ・トゥーバの家についての設立過程を報告した。在日セネガル人数が増える中、直観的に感じていた在日セネガル人の質的な変化をテキスト化できたことは、筆者の研究としても意義深く、和崎が主導してきた困難でインフォーマルな世界で生きるアフリカ出身者の日常実践としての研究群の中でも、宗教が全面に出た特徴的な事例となるだろう。また、新たなコミュニティ形成のプロセスに寄り添うことで、移民研究以外の研究視座のシードも見え隠れしている。

近年、アフリカの経済成長は凄まじく、アフリカの人びとの生活も大きく変化している。冒頭で触れた教育に関しても、現在のアフリカの都市部の親の多くは、大学進学までを視野にいれた教育プランを立てて

いることは珍しいことではない。子どもたちも目先のカネよりも、将来の社会的なステイタスに目を向けていることが多い。また、中産階級層が大きくなるにしたがって、こうしたビジョンを自力で実現する事例も少なくない。ゆえに、テクノロジーの国として位置づけられる日本への留学は、やはり工学系の大学に多いなど、こうしたアフリカの変化を踏まえれば、首肯できる在日セネガル人の質的変化は多い。

こうしたいくつかの研究のシーズを見いだすことができるものの、本稿自体は2020年のコロナ禍期以降、散発的な調査を展開しているのみで、具体的データも大変貧弱なものであることは批判を待たない。現在の調査状況を踏まえ、今後の課題を期して本論を閉じたいと思う。

まず、「三世代論」を精緻に検証するため、様々な年代のセネガル人への聞き取り調査を行い、サンプルを増やしていくこと、来日のきっかけとなった語学学校やセネガル人を多く受け入れる大学の招聘手法の検証、そして、セリーヌ・トゥーバの家の動向の参与観察を継続しながら記述していくことなどを進めていく。もう一点加えれば、在セネガル日本大使館が積極的に進める、セネガルにおける日本語教育の普及も、こうした動きに少なからず影響を与えるものであると思われる。今後セネガルで展開される日本語教育とこれまで日本語教育がどのようになされてきたか、という点も視野にいれつつ、研究を進めていきたい。

謝辞

本稿の調査は、科研費（21H00651/代表者：清水貴夫）と科研費（21H04413/代表者：日下部達哉）により実現しました。記して謝辞とします。また、貴重な研究発表の機会を与えていただいた「移民の参加と排除に関する日仏研究会」の皆様にも感謝いたします。

注

1 アーマド・バンバのガボンへの流刑された、サファル（イスラーム暦の第2月）の18日目に行われるセネガル最大の祭典。

2 池邉（2023）に詳しい。

3 アーマド・バンバによる詩に音節をつけた、ムーリッド教団特有の聖典の一つ。

4 ちなみに、2023年のマガル・トゥーバは次章で述べる埼玉県の「セリーヌ・トゥーバの家」に統合された。

5 ズィクル（スィカル sikar）とは、スーフィー教団の宗教的実践としてしばしばみられる。ムーリッドのズィクルは、「アッラーの他に神はなし la illa ha illa la」を繰り返し唱え」（池邉 2020: 76）ながら、複数の信徒たちが円を描くように回り、忘我の境地へと誘う実践。

6 鶏肉（ヤップ）の炊き込みご飯（チェブ）。セネガルの代表的な料理の一つ。

参照文献

Barth, Frederick ed., 1969, *Ethnic Groups and*

Boundaries: The Social Organization of Culture Difference, Oslo: Universitetsforlaget.
池邉智基，2020,「ムリッド教団の祭事における言説空間の形成――宗教的演説ワフターンの内容と形式に着目して」『年報人類学』(11): 73-95.
――――，2023,『セネガルの宗教運動バイファル――神のために働くムスリムの民族誌』明石書店.
小川了，1998,『可能性としての国家誌――現代アフリカ国家の人と宗教』世界思想社.
小川さやか，2019,『チョンキンマンションのボスは知っている――アングラ経済の人類学』春風社.
梶田孝道，2003,「『在日外国人問題』の変容――『統合パラダイム』と『トランス・ナショナルパラダイム』に着目して」『フォーラム現代社会学』2: 68-77.
菅野淑，2009,「在日アフリカ人ミュージシャンの生き抜く術――在日セネガル人ミュージシャンの事例から」『名古屋大学比較人文学研究年報』(6): 77-96.
――――，2021,「日本におけるアフリカン・ダンス――ダンスで日本とアフリカ、そして世界が繋がる」『季刊民族学』(176): 50-7.
外務省,「セネガル」（https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/senegal/index.html）最終閲覧日：2024 年 1 月 30 日.
清水貴夫，2008,「来住アフリカ人にとっての六本木――『アフリカ人－アフリカ人』のインフォーマルな接合の調査報告」和崎春日編『来住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究』（科研費報告書），135-44.
樋口直人・稲葉奈々子・丹野清人・福田友子・岡井宏文，2007,『国境を越える――滞日ムスリム移民の社会学』青弓社.
法務省出入国在留管理庁 e-Stat，2000 ～ 2022「国籍・地域別・年齢（5 歳階級）・性別・在留外国人」.
松本尚之，2014,「在日アフリカ人の定住化とトランスナショナルな移動――ナイジェリア出身者の経済活動を通して」『アフリカ研究』(85): 1-12.
――――，2019a,「グローバル化とアフリカの王位――在日イボ人と移民王制」『社会科学研究年報』(49): 129-37.
――――，2019b,「政治参加の公平性をめぐる期待と実践――ナイジェリア・イボ社会における伝統的権威者選びと民主主義」『文化人類学』84(1): 39-57.
ヤマグチ・アナ・エリーザ，2021,『変容する在日ブラジル人の家族構成と移動形態――分散型／集住型コミュニティの比較研究』世織書房.
和崎春日編，2008,『来住アフリカ人の相互扶助と日本人との共生に関する都市人類学的研究』（科研費報告書）.